

F・W・シェリング

『啓示の哲学』(21)

付録「ベルリンでの第一講 一八四一年十一月十五日」

諸岡道比古

皆さん

私はこの瞬間のあらゆる意義を自覚しているし、私は、この瞬間に関して言えば、何を引き受けるかを知っている。この場所に私がただ現れることによって何が語られ説明されるか、を私はどうして自分自身に隠そうとすることができだろうか、あるいはあなたがたにどうして秘密にしようとすることができるであろうか。確かに、皆さん、私は、私がずっと以前に哲学に貢献することができた以上に、私が今居合わせることによって、哲学に本質的な、それどころか偉大な貢献をすることができ、という確信を持っていないとしたら、私はあなたがたの前に立ちほしないうであろう。このことが、それゆえ、私の信念である。それにもかかわらず、私は、これ「私が哲学に貢献できる、ということ」が私に関する一般的な意見である、ということに期待するどころか、要求することをなお一層考えることはできない。せいぜい、誰も悪

意を持つて私をこの場所で見ない、ということをかち得るのを望むだけである。言い換えれば、私が私の諸講義の帰結全体を通してまさに与えようとしている *Die cur hic* 「言いなさい、なぜ、あなたがここにいるかを」へ詳しく答えるための時間と場所とが私に喜んで与えられる、ということをかち得るのを望むだけである。しかしながら、私は別の場所を見捨てたが、私とともに学問上の同じ目標に達することをいかなる人にも禁じない。ここで講義されたり、私がここで目の前にしているような聴衆に、注意を喚起したりする価値のある或るものへ、私は学問において到達した。——このものへの道は誰にでも開かれていたが、誰も言うことができないのは、私が急いで人に先んじた、ということである。哲学の歴史に新たな一頁を開くのに私が成功して、今や四十年である。その頁の片面は今や完全に書き記された。喜んで私は、／その片面の要約や結果を抜き出すこと、その一頁をめくることが、

そして新たな頁を始めることを他人に譲り渡すであろう。

私が引き受けた課題の重要さと難しさすべてを感じ取り、しかもなお、それらを忌避しなかった、ということを経験するならば、そうしたことの中にももちろん決定的な使命の意識が表明されている。けれども私はこの使命を自分自身に与えなかった。この使命は私の関与なしに私に生じてきた。いまでは、この使命が私に生じたので、私はこの使命を否認することも取るに足らぬものとすることも許されない。私は時代の教師であると僭称しなかった。もしも、私が時代の教師であつたならば、時代そのものが私をそうしたのであらうし、その際、私はいかなる功績も自分のせいにしていないであらう。というのは、私が哲学のために行つたことを、私は私の内的な本性によつて私に課せられた必然性に従つて行つたにすぎないからである。

この際、私自身について語ることを諸事情が強要する。しかしながら、空虚な自己賞賛は私のするところではない。哲学のために自分のなすべきことをなし、それをかなりのものと見なした後で、他の哲学が自由にするがままにし、その力を試させるために、自ら「表」舞台から退き、そうする間、あらゆる判断を沈黙して堪え忍んだ人物は、(この沈黙していることによつて、つまり新しい哲学の歴史的経過すら偽造することによつて作り出された乱用)によつてさえ動揺させられたり、沈黙を破つたりすることはない。この人物は——何も説明しない解説ではなく、最も懂れ願われた、有力で望まれた現実的な解説を与え、人間の意識をその現在の限界を超えて拡張する哲学を所有すること「——」、穏やかに次のことを伝言する。彼は完全に終わつてしまつてゐるし、

しかも彼は、疑いのない義務が彼にそうすることを命じるに至る以前には、つまり、決定的な言葉を語る時が今やつて来た、ということが彼に反対しがたく明らかに至る以前には、この沈黙を完全に全く破らない、と。皆さん、この人物がおそらく示したのは、彼は自己否定することができると、ということ、彼は性急な自負 *Einbildung* に悩まされない、ということ、彼には一時的な意見、つまり素早く獲得すべき短時間の名声より以上のものが問題である、ということである。

361
／おそらくある部分で私はうんざりしなければならない、ということを私は感じている。私が構築したことは突きとめられていたし、私に何があつたのかは極めて正確に知られていた。いまでは、私とともに新たにやり始めるべきであり、そして、知られていなかった何か或るものが私の中にあつた、ということ洞察すべきである。

物事の自然な順序に適うのは、私の代わりにこの場所に、課題を解決するだけの力があるより若い人が立つべきことである。この人が来る——私は喜んで彼に席を譲るであらう。しかしながら、私が至る所で、資金としきたりとに骨を折つてゐるのを見た、たいそう多くの優秀なより若い才能ある人々を、私は気の毒に思う。彼らについて私が知つたことは、彼らが何もなしえない、つまり彼らから何も獲得しえない、ということである。私は彼らを喜んで私の元に引き寄せ、私について何も知ろうとしない彼らを喜んで助けるであらう。ところで、私が時代によつて、つまり哲学の今までの歴史すべてによつて、必然的なものとしてすなわち要求されたものとして認識したものが、成就されるべきであるならば、

私自身着手しなければならないし、私がこの仕事のために本来取って置かれたに違いない、ということをおは感知しなければならなかった。——ドイツ哲学のこの中心地において、つまり、より深く考えられたあらゆる言葉がドイツ国全体のために発せられたことで、それどころか、この言葉はドイツ国の境を超えてすら運ばれたが、この地でのみ、決定的な作用が可能であつたし、いずれにせよ、ドイツ哲学の運命が決定するに違いないこの地で、つまり、ここで、教師として働くことが私に要求された時、この時、つまり、たいそう重要な時点に、しかも、神が私の生命をたいそう長く延長したのに応じて、私の人生の守護神であつた哲学に不足がないことを私は不可避的な義務と認識しなければならなかったし、ただこの考えが、この明瞭な確信のみが私に決定させることができた。

362

なるほど私は、私を動かした他の多くのものが私の前にあつた、ということをお否定しない。「それらは——」王が心胸や精神の特性によつて高められる以上には栄光に満ちた王冠は王を高めないが、王の緋衣が王を飾り立てた以前に、長い間私の敬慕を捧げた王に、たとえ短い時間であれ、仕えること「1」。あらゆる真のドイツ人は子供の頃から国と国民の、道徳的力と政治的力とに忠誠を誓うのが常であり、そのうえ最近の、永遠に／考える価値のある出来事によつて、新たに忠誠を誓うことを教えられたが、その国と国民「2」。ドイツにおける学問と常に前進する教養との中心地が問題になる時、まずもつて名前が挙げられる都市。力強い海のように、どんな微かなそよ風によつても動かされないし、確かにまたおそらく時おり停滞させる作用をした都市（私は、す

でに、カントの哲学が祖国ドイツの首都においてばかりでなく、ドイツすべてにおいて、反響を見いだしていた時代を思い出す）「3」。しかしそれに対して、その都市はかつて認識された有能さを力強く利用し促進する。それから、この都市の学者たち、つまり最も高貴な誉れのある人々のこの仲間「4」。この仲間の中で、私は多くの、一部分は若い時から私と親しい人々や、他の、長い間極めて尊敬されている人々を知つたが、彼らと力を合わせて生きることに、力を合わせて働くことを私は何時でも私にとつての喜びに、幸福に数え入れるであらう。最後にこの若者「5」。この若者について知られていることは、彼らが学問の招きに従うのに慣れていること、つまり、価値ある目標が彼らに差し出されると、彼らは困難さを恐れるのではなく、ただ真の学問の痕跡や進路が彼らに示されるならば、喜んでその道に身を投じ、教師にすら先駆けをする、ということである。——皆さん、これらすべてが偉大な、それどころか、ほとんど抗しがたい「暴」力の吸引力でした。しかしながら、これらすべてがたいそう力強かつたので、これらが他の諸々の熟慮を退けねばならなかつた。他の諸々の熟慮はたいそう馴染みなものであるので、私はそれ故にそれらを引用しないよう強いられた。私は、あらゆる関与なしに私になされた要求の中に命令を認めねばならなかつたときに初めて、私は、私の究極的で最高の職務 *Lebensberuf* を逸することなしには、この命令に逆らうことを許されなかつたし、また逆らえなかつた。その時、私は決断したし、事実また私は決断してしかも確信してあなたがたの中へ入り込んだので、私がいつか哲学のために、多かれ少なかれ、何かをなすならば、つまり、私が（哲学がまさに）置かれ

て」いる否定しえない困難な立場」から再び、〈哲学から今奪われている、自由で、無頓着な、あらゆる面から妨げられない運動〉へと導くことに成功するならば、私はここで哲学のために最も重要なことをなすであろう。というのは、哲学が格闘しなければならぬこれらの困難は周知のことであり、秘密にしえないからである。

／この瞬間におけるほど、生の側面からたいそう強力な反動は、哲学に対してまだ決して持ち上がってきいてはいなかった。このことが証明することは、誰にも無関心であることが認められていないし、それどころか可能ですらないあの生の問題「ゆゆしい問題」にまで、哲学が突き進んでいた、ということである。哲学が自らの前進の最初の始まりあるいは最初の段階にいる限り、哲学を自らの「人」生の仕事に自らではしなかった誰もが、哲学を気にかけない。他のあらゆる人々は、世界に対して哲学がその結果 *Resultat* によって初めて重要性を獲得する、という哲学の終わりゆえに、哲学に期待する。

それにもかかわらず、無経験さのみが深く思いこみうるであろうことは、根本的で厳格な学問の成果 *Ergebnis* として哲学に保証されるあるいは提示されるあらゆる結果、つまりあらゆる結果が区別なしに公開されることを世界が厭わない、ということである。結果にとってそうであるならば、哲学は諸事情により、例えば、本質的に不道德な *unständig* 教説あるいは道德性の基礎 *Grundlage* すら廃棄する教説に屈服しなければならない。しかし、このことを誰も哲学に期待しないし、哲学にこのことを「不当に」要求したいかなる哲学者も未だ見つけ出されていない。哲学はこのことに関して拒絶されないであろう。つまり、哲学は諸原理を

理解しないのではなく、言い換えれば、哲学は諸証明の技巧的で複雑な歩みを理解しないのではなく、諸証明を振り返ることなく、哲学は、このような結果に到達した哲学がまたその諸原理においてまともではあり得ない、ということを主張する。古代ローマの道学者が有用なものについて語ったこと、*nihil utile nisi quod honestum* 「正しいものを除いては、何もものも有用ではない」〔セネカ書簡集第二〇巻、書簡百二〇〕「セネカより親愛なるルーキーリウスへ」第三節にある言葉 *Nihil est bonum nisi quod honestum est* をもじつたのではないかと思われる。 *Epistulae ad Lucium, CXX. SENECA LUCILIO SUO SALUTEM, 3, The Loeb Classical Library, No. 77, p. 380.*〕は真なるものについても語られねばならない。ところが、道德的なものに関してあらゆる人が真実と認めることは、人間の生「活」を束ねておく他のあらゆる確信に、それゆえ特に宗教的生「活」に適用されなければならない、ということである。自分の対面を重んじるいかなる哲学も、哲学が無宗教 *Irreligion* に終わる、ということを実際と認めないであろう。ところが、哲学はまさに、哲学がその結果において宗教的であることを確信している状態にある。しかも哲学は、人がこのことを哲学には認めないし、特に（キリスト教教義を哲学が演繹すること）をまやかしのみ承認する、という状態にある。こうしたことを哲学の忠実な弟子であれ不忠実な弟子であれその若干の者ですら言う。それがどの様な事情にあれ、まずもってどうでも良いことである。疑念が引き起こされ、意見が存在することです十分である。

／生は結局つねにどこまでも正しいし、そういうわけで、結局

のところ実際にこの面から哲学そのものに危険が迫っている。特定の哲学を酷く誹ることを口実にするが、結局すべての哲学を指して、しかもその心胸の中で、そもそも哲学はもはや存在すべきではない、と言う人々がすでに準備をしている。私もこの際無関係ではない。というのは、その宗教的結果ゆえに、今たいそう一般的に悪く取られているこの哲学への最初の衝撃は、思われているように、私から出ている。ところで、この際私はどの様に振る舞おうとするのであろうか。確かに、私はいかなる哲学をもその究極的な成果という面から論駁しないであらうし、その上、こうしたことを哲学的な人物、つまり最初の諸概念を判断することができる人物は簡単にはしないであらう。それに加えて、十分知られていることは、私が最初からすぐにあの哲学の始まりに満足しなかったし、一致するなどんでもないと説明したことである。

それゆえ、考えられたかもしれないことは、私があの体系に異論を唱えることを主要な仕事にするだろうし、哲学に対するこのような刺激をその体系の諸結果が生み出したのだ、ということである。皆さん、事実はその通りではないのである。私がただこのことをすることができたなら、私はここにはいないであらう。私は私の使命について敬意を持たなくてはならない。このようなやな仕事を私は喜んで他人に引き渡す。私はこの仕事をいやだという。というのは、特別な気力と結びつけられた或るものが自ずから解消するのを見ることは、何時でも必ず悲しいことであるからである。精神的で道徳的な世界は、たいそうばらばらになり、たいそう無秩序になりがちであるので、いつものように、たとえ瞬間にすぎなくとも、一致点が与えられる時、喜んで良いのである。しかし、

或るものの代わりに何もあてがうことができないならば、そのものを破壊することは、なお一層悲しいことである。しつかりやれよ、と人は、ただ非難する人に当然言う。ここで生きている者たちの元にはもはや見い出さなかったために私が心から遺憾に思う人物「ヘーゲルのこと」も同じく正しかった。その人物は、ほめるに値する率直さでもって、「体系を人は一度持たねばならない。体系は体系によってのみ反駁されうる。持続する体系に他の根拠のある体系が対立しない限り、持続する体系をこのままにしておいてもいい」、と言った⁽¹⁾。

(1) ガンス「ヘーゲル法哲学への序言」一四頁 [Hegel Sämtliche Werke, Friedrich Frommann Verlag, 1964, Bd. 7, S. 10. シェリングは原文を随意に引用している。原文は以下の通りである。] Aber Systeme können nur durch Systeme widerlegt werden, und so lange ihr uns kein wissenschaftliches zu bereiten gedenkt, müssen wir bei dem bleiben, welches wir haben.」

ところで、彼が体系に関し語るものについて、私は彼を正しいと認める。／もちろん、もはや個々のものは十分ではないし、個々に（このことについて人は確信している）何ものも本来知られない。しかも次の点においても同一の人物は正しくなくはなかった。つまり、同一哲学の創始者「シェリングのこと」が、噂のように、彼「創始者」を目立たせたものから、つまり彼の原理から離れ、しかも「学問的に探求しがたい信仰」の中に、つまり歴史の中に、彼の新しい哲学が身を寄せた避難所を探した「この一文は Hegel Sämtliche Werke, Friedrich Frommann Verlag, 1964, Bd. 7, S. 9 からの引用」、ということに自らの怪訝さを表すことにおいて「同一の人物は正しくなくはなかった」。そのことについてただ私は私個人として訝しがっているにすぎない。つまり、

その他の点でたいそう賢明で分別のある人物が自らの訝しさを明るみに出す以前に、彼が、知れ渡っているものが一体正しいかどうかと問わなかった、ということ「を私は訝しがっているにすぎない」。というのは、この人物が生きているならば、彼はこれらの講義の帰結を通して、彼が信じ込まされたのとは実際のところまったく別の事情にあるのかを、経験するであろうからである。

それゆえ——論争と普通名付けられているが「——」、目的として論争は決して現象しないであろうし、いずれにせよ、副次的なこととしてのみ現れるであろう。もしも私が同時に過去を振り返り、今までの展開の歩みを確認しないとしたならば、もちろん、この講義は、私がそれに望むほど啓発的ではないであろう。しかしながら、哲学の約束の地へ実際に押し入るため、私たちすべてがどこで失敗し、私たちすべてに何が欠けているのか以上に、この人あるいはあの人がどこで失敗したか、を示す努力を私はしないであろう。ある人がたいそう思い違いをするならば、その人は一層思い切つてする。つまり、彼は目標から逸れると、彼は、先駆者が彼に閉ざさなかった道をどこまでも進んでいく。

他人に打ち勝つために私は来たのではなく、私の職務を完遂するために来た。

完全な確信を持つて真理を認識することは、たいそうすばらしい財産 *ein so großes Gut* であり、その上評価 *Existenz* と名付けられるものにとって、人々の意見や世界のあらゆる無内容さはまったく取るに足らないものである。

私は傷を負わせようとするのではなく、ドイツの学問が長い高貴な戦いの中で戦いから受けた傷を癒やそうとするのであり、い

366

い気味だと思って現にある被害を明らかにしようとするのではなく、できる限りそれらを忘れさせようとするのである。私は挑発しようとするのではなく／和解しようとし、できる限り平和の使者として、たいそう幾重にもあらゆる方向へ引きちぎられた世界の中へ歩を進めようというのである。破壊するために私は現存在しているのではなく、建設するために私は現存在しているのである。つまり、哲学が今から安心して住める城を築くために現存在しているのである。私は、より以前の諸々の努力によって置かれた基礎の上に建てようとしているのである。カント以来、真の学問のために獲得された何ものも、私によって当然失われぬ。私自身が以前基礎づけた哲学を特に、つまり私の若さが作り出したものを、私がどうして放棄すべきなのであるうか。他の哲学に置き換えるのではなく、今まで不可能と見なされた新しい学問を哲学に付け加えること、そして次に、そうすることによって哲学をその真なる基礎付けに再び固定し、哲学がまさに自らの自然的諸限界を超え出ることによって——まさにそうすることによって「——」失った立場 *Haltung* を哲学に再び与えること、すなわち、より高次の全体の断片でありうるにすぎなかった或るものが自ら全体にされようとする——このことが課題であり意図である。

哲学がこの時代に一般的な要件になった、ということは重要な事柄である。私が登場することにおいて、私が自分の周りに認めえた、言及した刺激すら、つまり人々 *Gemüther* のこの動きを示していることは、単に学校の事柄であることを哲学が止めた、すなわち哲学が国民の事柄になった、ということである。ドイツ哲学の歴史は初めからドイツ民族の歴史に組み込まれていた。ド

イツ民族が宗教改革において解放という偉大な所行を完成した当時、その時まではただ盲目的にのみ認識されていた最高の対象すべてが理性によって吟味されたまったく自由な認識に取り入れられ、そのような認識において自らの地位 *Stellung* を見いだすまで、ドイツ民族は休まないことを堅く心に誓った。最も酷く沈み込んだ時代に、哲学はドイツ人を支持した。滅亡した栄光の廃墟の上に、能力のある人々は、〈最善の若者が寄り集まる、ドイツの学問という旗〉を高く掲げた。哲学者たち——誰がここドイツでは、フイヒテを覚えていないだろうか、誰が同時にシユライエルマツハ、ハ、を覚えていないだろうか——の諸学派の中に、多くの人は意志の強さを見出したし、哲学をめぐる諸々の戦いの中に、／やがてまったく別の戦場で確かめられる勇氣と思慮深さを見いだした。—— またより後にもまだ、ドイツ人の哲学には名声と遺産が残っていた。ところで、この長い名声に満ちた運動は不名誉な難破で、つまり偉大な確信すべての破壊とそれともに哲学そのものの破壊とで終わるべきであろうか。断じてそうであってはならない。私は一人のドイツ人であるがゆえに、私はドイツのあらゆる幸福と安寧と同様にあらゆる不幸と憂いとを私の心胸の内で分かち合い同感するがゆえに、それゆえ私はここにいるのである。というのは、ドイツ人の救いは学問の中にあるからである。

このような心術「気持ち」で私はここに来た。つまり、真理という武器以外の武器なしに、真理が自らの強さの中に持つとは別の保証 *Schutz* を要求することなしに、私があらゆる人に萎縮しないで保持することを願うのとは別の権利を私のために熱望することなしに、私はここに来た。「私が熱望する権利とは」自由な

研究と探求されたものを妨げられずに伝達することという権利である。そうした気持ちで、私はあなたがたの真ん中へ歩み出る。私は私の精神と心胸のまったく真摯さを携えてここへ来る『マタイによる福音書』5-17, 18, 19, 20 参照。わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためではなく、……完成するためである。』。私は本気であり、私の言うことを聞くであろう人々も本気であってほしい。心から私はあなたがたを歓迎する。あなたがたも心から私を受け入れてください。教師は多くのことをなすことができるが、生徒なしでは何もすることができない。私はあなたがたなしでは何もできないし、あなたがたの熱心な歓迎なしには、またあなたがたの側での熱意なしには何もした感受性なしには、またあなたがたの熱意なしには何もでもない。このようにして、私は受け取った使命に身を捧げ、私はあなたがたのために生き、あなたがたのために働くであろうし、疲れることがないであろう。私の中に息吹がある限り、そのものが許すあいだ、そのものの意志なしには髪の毛が私たちの頭から抜けることはない『使徒言行録』27:34 参照、……あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。』。いわんや、私たちの内なるものの真心の言葉、真の産物、真理や自由を得ようと努力する私たちの精神の明るい思想 *Lichtgedanke* が無くなっていくことはない。

ここに翻訳したものはフリードリッヒ・ヴィルヘルム・フォン・シェリングの『啓示の哲学』（一八四二年）に付録として収録されている、一八四一年から四二年にかけて行われた講義の第一講「ベルリンでの第一講 一八四一年十一月十五日」である。

これで『啓示の哲学』すべてを翻訳することになる。次回以降において、本書の概要を明らかにする文章を記すつもりである。訳者の能力並びに本邦初訳故の誤りを出来る限り少なくするために、忌憚のないご批評ご指摘をお願いいたします。(20)以前については弘前大学人文学部紀要第20号を参照されたい。

なお、「」のなかはすべて訳者の補いであり、〈〉は文章を明確にするために訳者が適宜付け加えたものである。欄外の数字は原文のおよそのページ数である。